鷹取山自然観察会会報

2019.6.9　NO.24

鷹取山の植物相調査結果　－２０１８年調査－

鷹取山は三浦半島北部に位置しており、神武寺から繋がる自然豊かな場所として、神奈川県生物多様性ホットスポットに選定された場所である。鷹取山自然観察会では 2013 年 11 月から会員有志で植物相調査を開始し、今回で 5 年間実施したことになる。調査結果についてはこれまでに会報 12、16、20 号で報告してきたが、今回は、前回の結果を含めて 2018 年 1 月～12 月までの調査について報告する。

1. 調査範囲及び区間別の特徴

鷹取山周辺は鷹取山公園を中心として尾根沿いに緑地が広がっている。西側には沼間～神武寺まで広大な緑地となっている。この地域の全てを調査することは困難であることから、神武寺に至る逗子側を除き、横須賀市側について植生の違う場所を選定して行うこととした。選定した調査区間は調査ルート 3.5km として、植生の違う６区間に区分した。各区間の植生の特徴は表 1 及び写真に記載したとおりである。

区間別にその特徴をみてみると、Ａ区間は鷹取山公園を中心とした場所であり、カラスザンショウ、アカメガシワ、コナラ、クヌギ、オオシマザクラ、ミズキ、イヌシデ、ケヤキ、ムクノキなどの落葉広葉樹とスダジイ、タブノキ、アカガシ、ウラジロガシ等の常緑広葉樹もまばらにみられる。また、ヤマグワ、タマアジサイ、シバヤナギ、キハギ、ヤマツツジ、ハコネウツギ、ヒメウツギ、マルバウツギ、コゴメウツギなどの中低木も多くみられる。草本類では展望台付近にセンボンヤリの群落、岩場にはケイワタバコの群落が見られる。ケイワタバコは横須賀市内では貴重な種でもあるが、しばしば盗掘にあい保全策が必要である。公園内には草地の広場があり、毎年不定期ではあるが草刈りが行われている。この草地には、イネ科植物、キク科植物が生育していて、最近はブタクサ、セイタカアワダチソウ、アレチヌスビトハギ、メリケンルカヤなど帰化植物も侵入し、増えている。

Ｂ区間は湘南鷹取住宅と子供の遊び場としての公園がある。住宅地は路傍雑草などが中心でアブラナ科、アカバナ科、キク科、イネ科など

表１　調査区間の植生など特徴

区間	植生など特徴	距離
A	鷹取山公園落葉広葉樹林、一部草地も含む	540m
B	市街地の舗装道路及び公園	600m
C	シイ、カシ等常緑広葉樹林、一部桜並木含む	1300m
D	コナラ、オオシマザクラ等落葉樹林	270m
E	スギ林縁部（逗子沼間自然環境保全地域境界）	540m
F	畑地及び林縁	230m

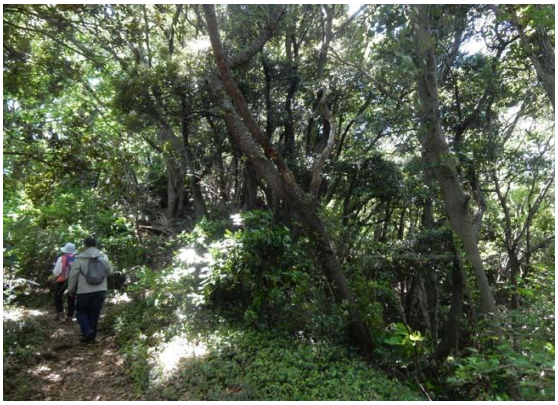
の外来種も多く確認されている。また、鷹取小学校の石垣にはトラノオシダ、イヌカタヒバなどのシダ類、コモチマンネングサ、コバノタツナミ、シンテッポウユリなどが年間を通じて見られる。

Ｃ区間はアカガシ、スダジイ、ウラジロガシなどの常緑広葉樹が中心で、他の区間と植生の違いがみられる。冬でも暗い森であり、林内は下草が少ない場所もある。この区間にはクロモジ、ヤマコウバシ、ハナイカダ、ツルシキミ、ムラサキシキブなどの中低木もみられる。草本類ではキッコウハグマ、ツルカノコソウ、ヤマネコノメソウなど、この区間でしか見られないものも数多い。

Ｃ区間の一部で 2017 年に東電の鉄塔補修工事のためレール等が引かれた。レール設置に伴いコナラ、スダジイ、アカガシなど数十本が伐採された。スダジイなどの一部はひこばえが出始めているが、コナラの大木は殆どが枯れてしまい新芽は出てこなかった。伐採後にはカラスザンショウの実生が多く見られる。今後の植生の変化を確認していきたい。

Ａ区間（鷹取山公園）

Ｂ区間（住宅地）



Ｃ区間（シイ、カシ常緑樹林）

Ｄ区間（落葉樹林）

Ｅ区間（スギ林縁部）

Ｆ区間（畑地）

Ｄ区間ではクヌギ、コナラ、オオシマザクラ、ニガキ、イタヤカエデなどの落葉広葉樹が多く、下草としての草本類は豊かである。この区間は、在来種の比率が高く、ツクバトリカブト、ホタ

ルカズラ、ヤマハッカ、タムラソウなど在来の植物相が残っている区間である。

Ｅ区間は逗子市沼間の保安林及び自然環境保全地域に指定された林縁である。林内には、スギ、ヒノキ、シロダモ、アオキ、ヤツデ等の常緑樹や、中低木としてムラサキシキブ、カマツカ、ガマズミ、ツクバネウツギなどの落葉樹も普通に見られる。

Ｆ区間は畑地がある場所であり、畑地沿いには、ニラ、ノビル、ヒメウズ、ヒガンバナ、オオジシバリなど草地や土手などに生える草本類が多く見られる。

2. 調査方法

2016 年 2 月に環境省自然環境局生物多様性センターが主催するモニタリングサイト 1000 里地調査の一般サイトに鷹取山が登録された。これにより、環境省自然環境局及び日本自然保護協会における「モニタリングサイト 1000 里地調査（モニ 1000 里地調査）マニュアル」により調査を行った。

植物相の調査にはさまざまな方法があるが、モニ 1000 里地調査では自然観察会のように定められたルートを定期的に歩いて植物の種名を記録する「トランセクト法」で行っている。この方法は、「高い精度で調査を行うことよりも、同じ精度で継続的に植物相を記録すること」を第一に優先している。

調査は毎月１回、第２金曜日に行っている。モニ 1000 調査マニュアルでは、木本及びシダ類、イネ科、カヤツリグサ科は除いてもよいとなっているが、ここでは維管束植物のすべてについて調査することとした。シダ類については 6、10 月の年 2 回調査した。

種名は木本類、草本類に分け全員で確認の上記載することとした。記載の方法は、原則として蕾、花、実の状態を記載した。種が不明なものについては標本を採取し、後日博物館等で同定・確認した。

3. 調査結果

2018 年までに確認した種は表 2 のとおりであり、670 種（前年 653 種）であった。木本 62 科 196 種（前年 194 種）、草本 62 科 421 種（前年 409 種）、シダ植物 16 科 52 種（前年 50 種）であった。毎年種数は増加しているが、調査を重ねることにより見逃しが少なくなったためである。区間別の調査結果は表 2 のとおりである。表の中で観察路以外として六浦方面、浜見台方面、鷹取川上流の植物種を追加した。

表 2　区間別の調査結果

区分	A	B	C	D	E	F	観察路以外	合計
草本	286	235	204	156	136	160	14	421
木本	130	65	104	90	84	74	7	196
シダ類	31	16	27	28	14	21	1	53
合計	447	316	335	274	234	255	22	670

(1). 新たに見つかった種

観察を続けていると新たに見つかる種があり、楽しみでもある。草本ではスズメノヒエ、イシミカワ、ヤマラッキョウ、コシロノセンダングサなど、木本ではボダイジュ、オニツルウメモドキなどが新たに見つかった。以前から生育していたもので、見逃しがあったものと思われる。ヤマラッキョウは以前には普通に見られたもので、今年は数カ所で見つかっている。ボダイジュは花の散った後で見つけられた。

(2). 帰化植物

調査区間の自然度を見るため草本類について帰化植物と在来種の分布割合を調べた。帰化植物とは、外国原産の植物で、牧草用や鑑賞用として輸入されたものが野生化して各地に広まっていった植物である。一方、日本に古来から生育している種は在来種といわれている。一般的に都市化されてくると帰化植物が入り込み在来種の生息域を狭めてくることが知られている。

また、逸出種という栽培種が野生に入り込むものがあり、逸出種も帰化植物に入れた。逸出種にはオシロイバナ、ヒルザキツキミソウ、ムラサキカタバミなど園芸種などから野生化したものが多くある。帰化植物・逸出種の区分は横須賀市自然・人文博物館編「三浦半島の野生植物」によった。

区間別の帰化植物の割合は、図 1 に示した通りである。区間全域の帰化率は 27%であった。ちなみに神奈川県植物誌 2018 によれば、神奈川県全域で 32.0%となっていて、帰化率は年々増加傾向にある。

区間別に特徴を見ると、Ａ区間は鷹取山公園内であり、人の出入りも多く、開けた草地があるためイネ科、キク科等の帰化植物が増加している。また、人により持ち込まれた園芸種が年々増加傾向にある。Ｂ区間は住宅地の道沿いと広場などであり、帰化率が高くなっていた。一方、ＤＥ区間は在来種の割合が高く、帰化植物が少なくなっている。

図１　帰化植物と在来種の割合

(3). 貴重種

今回の調査では 650 種を越える種が確認されたが、多くの種が株数も少なく絶滅に近い状態にある。以前はエビネ、キンラン、ギンランなどラン科植物はこの地域では普通に見られたと聞いているが、現在では人の目につくところでは生育していない。

特に数が少ない種を挙げると次のとおりである。草本類ではヨツバムグラ、イチヤクソウ、オオカモメヅル、コバノカモメヅル、カガイモ、ツリガネニンジン、ヤマホタルブクロ、カシワバハグマ、キクアザミ、タムラソウ、ヒメガンクビソウ、ニオイタチツボスミレ、タカトウダイ、ワレモコウ、クルマバナ、アマドコロ、エビネ、キンラン、ギンラン、タシロラン、アカショウマ、イワギボウシ、ナンバンギセル、フデリンドウなどである。マヤランなどはここ数年見られない。

木本類ではクロモジ、ヤマコウバシ、ハチジョウクサイチゴ、ウラジロマタタビ、ミヤマシキミ、メギ、イワガラミ、タラノキ、ムクロジ、コバノガマズミ、クサボケ、調査区域ではないがカゴノキなどは株数が少ない。

草本類や低木は、過度の草刈りや伐採にあって数を減らしている。一方、アズマネザザなどの繁茂によって草本類の生育場所が狭められている。鷹取山周辺の緑地は鷹取山公園、横須賀市都市林、沼間の自然環境保全地域などであるが、民地も多く貴重種の保全は難しい課題と考えられる。

4. その他

三浦半島における植物相調査は、神奈川県植物誌会や市の植物相調査が行われているが鷹取山周辺について通年の調査は行われていない。当会は 2013 年から調査を開始し、2016 年 4 月に鷹取山がモニタリングサイト 1000 里地調査に登録され、モニ 1000 里地調査により継続的に行っている。

当会では、今後も植物相調査を毎月第 2 金曜日に行っていく予定である。観察することにより、絶滅していく種やこの地域で新たに見つかる種もあるかもしれない。調査することは楽しみでもあり、続けることでこの地域の植物相がはっきりしてくると思う。

鷹取山周辺の緑地は住宅開発によって年々減少し、植物相や昆虫など生き物の生息場所が狭められている。この残された緑地は多様な生物の生息場所として、いつでも自然観察できる里地・里山を後世に残してほしいと願っている。

2018 年の調査に参加した人（敬称略）

本多久男、金子龍次、小池順子、中村紀雄、
高橋和子、三科清高、郡司久、村上良二、
島村健二、原秀子、北村悦子、竹之下香苗、
市川實、伊藤保信、伊沢昭司

総会の開催（報告）

鷹取山自然観察会では 5 月 12 日の自然観察会終了後に総会を開催しました。当会の活動は、子供から大人まで地域住民に自然環境の大切さを認識してもらうため、自然観察を通して自然保護の大切さを呼びかけ、「自然観察の里山づくり」を目指していきます。

総会では昨年度の会計報告と今年度の事業計画について説明し、予算、事業計画案は了承していただきました。今年度の事業は昨年度とほぼ同様であり、事業計画は次のとおりです。

令和 1 年度事業計画

1．自然観察会の開催

⑴　定期的な自然観察会の開催

実施時期　毎月第 2 日曜日

2．植物相調査など生き物調査

環境省のモニタリングサイト 1000 里地調査により植物相及び蝶、鳥類について調査ルートを歩き、記録する。また、セミの抜け殻調査などを行う。

⑴　**植物相調査**　第 2 金曜日

⑵　**蝶類調査**　4 月～11 月の間　第 1、3 金曜日

⑶　**野鳥調査**　越冬期：12 月～3 月の間
第 1、3 金曜日に 1 往復
繁殖期：5 月 24 日、6 月 11 日、
6 月 28 日に 1 往復

⑷　**セミの抜け殻調査**　7 月 26 日金曜日、
8 月 23 日金曜日　2 回

⑸　**鷹取川の水辺環境調査**　4 月 26 日金曜日

3．樹木板の設置

鷹取山公園を中心に平成 25 年から樹木板を設置している。今年度は傷んだものの掛け替えを行う。

実施時期　未定

4．巣箱の掛け替え

平成 25 年から野鳥の保護と野鳥観察を目的として巣箱掛けを行ってきた。現在約 17 個の巣箱が掛かっており、その掛け替え作業をする。

実施時期　令和 1 年 11 月 22 日金曜日

５．会報の発行、掲示板などによる情報発信

⑴　**会報**　　年４回（6 月、9 月、12 月、3 月）発行し、会員、横須賀市長、横須賀市博物館、県博物館、横須賀市・逗子市・神奈川県の自然環境関係機関、横須賀市会議員 4 名、横須賀市自然環境活動団体交流会、鷹取山安全登山協議会などに送付する。

⑵　**掲示板**

鷹取山公園に市が設置した掲示板を活用し、季節の花だより、山で見られる蝶、野鳥、ドングリ、樹木マップなどポスターを作成して掲示する。

掲示板　毎月更新

⑶　**ホームページの更新**　　随時更新する。

６．鷹取山公園の利用について

鷹取山公園を管理している横須賀市と昨年度「鷹取山公園等を自然観察の里山づくりの利用について」として協定を結び次の活動をする。

⑴　貴重種の保護を目的とした看板、柵の設置

⑵　ビオトープ、貴重植物の保全活動

⑶　その他自然保護活動

７．他団体との情報交換

⑴　横須賀市自然環境団体交流会

⑵　三浦半島まるごと博物館

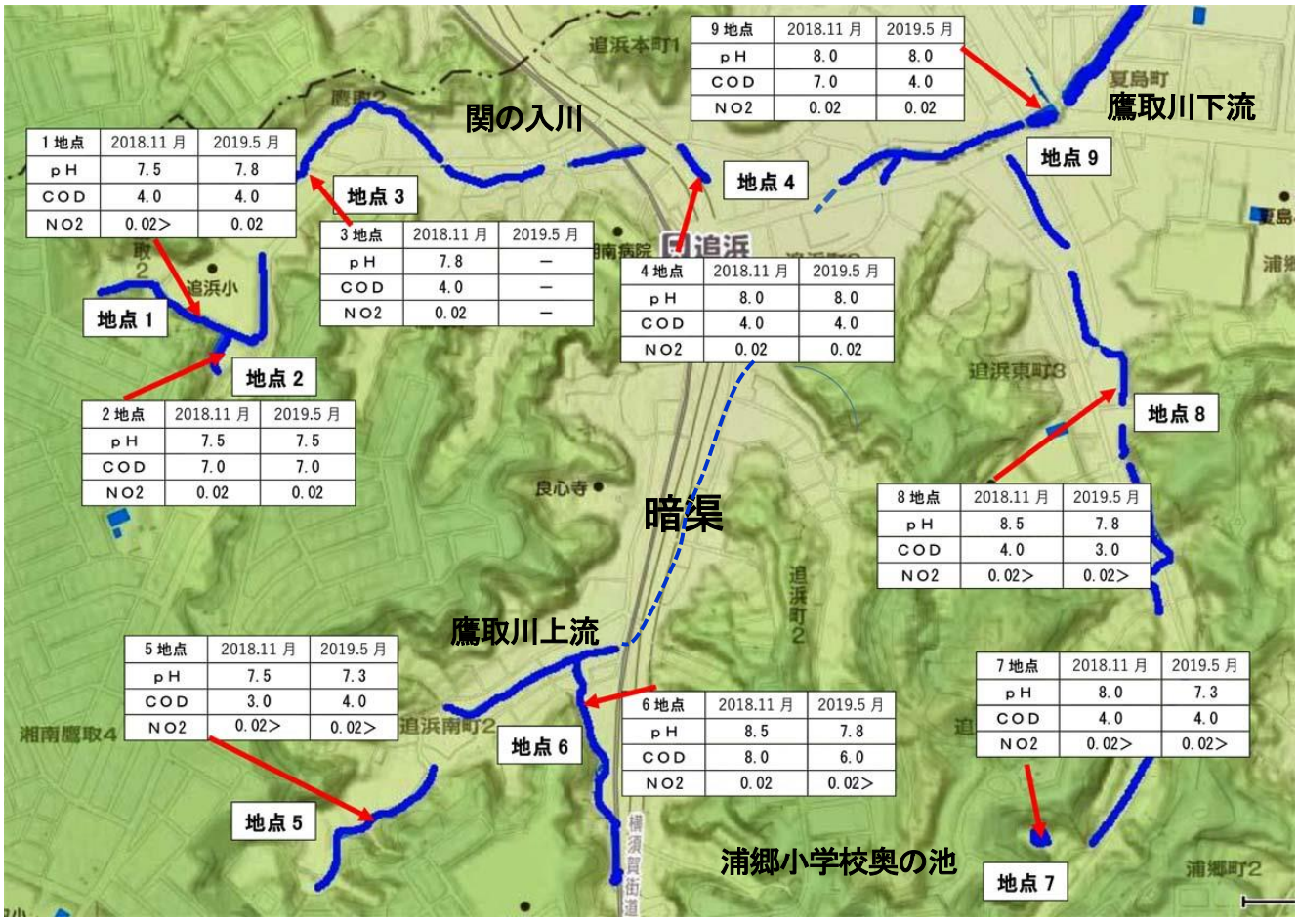
８．小学校などからの依頼

鷹取小学校などからの観察会の依頼があれば、協力していく。

鷹取川の水環境調査

鷹取川は、鷹取山を主な水源として東京湾に流れ込んでいて、主に 3 本の支川がある。鷹取川の下流部は県が管理する二級河川（570m）と、市が管理する鷹取川上流と関の入川の普通河川、浦郷小学校辺りを流れる雨水幹線となっている。

鷹取川の水環境調査を昨年 11 月に一度行っている。その結果については会報 22 号に掲載しているが、今回は 5 月に 2 回目の水質調査及び生き物の生息調査を行ったので報告する。



1 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	7.5	7.8
COD	4.0	4.0
NO2	0.02>	0.02

2 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	7.5	7.5
COD	7.0	7.0
NO2	0.02	0.02

3 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	7.8	―
COD	4.0	―
NO2	0.02	―

4 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	8.0	8.0
COD	4.0	4.0
NO2	0.02	0.02

5 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	7.5	7.3
COD	3.0	4.0
NO2	0.02>	0.02>

6 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	8.5	7.8
COD	8.0	6.0
NO2	0.02	0.02>

7 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	8.0	7.3
COD	4.0	4.0
NO2	0.02>	0.02>

8 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	8.5	7.8
COD	4.0	3.0
NO2	0.02>	0.02>

9 地点	2018.11 月	2019.5 月
pH	8.0	8.0
COD	7.0	4.0
NO2	0.02	0.02

1.鷹取川の水環境調査

(1).水質調査

鷹取山自然観察会の有志で、5 月 1 日に鷹取川の水質と周辺環境について調査した。水質調査項目は前回と同様、①.ｐＨ、②.ＣＯＤ（化学的酸素要求量）、③.亜硝酸性窒素（ＮO2）④.透視度の 4 項目について行った。

(2).調査結果

調査地点は前回と同様、関の入川、鷹取川など9地点について行った。調査結果は、次図のとおりであり、昨年 11 月の結果と今回 5 月の結果を併記した。5 月の調査では透視度は全て 45㎝ 以上あったので省略した。

2 回の調査では、地点 2、地点 6 を除いてはＣＯＤ 4 ㎎/ℓ 以下であり、比較的良好であった。亜硝酸も 0.02 ㎎/ℓ 以下か 0.02 ㎎/ℓ 程度であり汚染の程度は低い結果であった。

2.生き物生息調査

5 月 23 日に鷹取川支川の関の入川と浦郷小学校奥の池の2ヶ所について水生生物の生息調査を行った。5 月 21 日に大雨が降り、水生生物に多少影響があったかもしれない。当日の採取に当たっては、水生生物に詳しい齋藤和久さんに協力していただいた。なお、現場で採集した魚は、元の河川に放流した。

(1).関の入川の上流部（追浜小学校裏）

（2019.5.23　9:50～10:40　快晴　気温 24℃

水温 20℃）

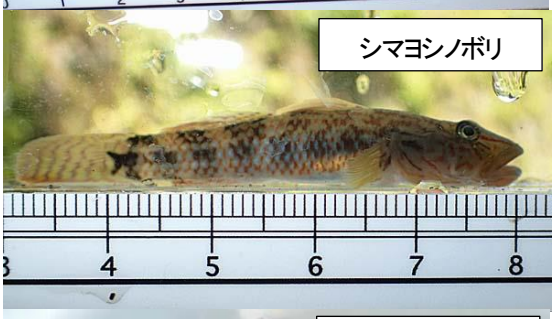
関の入川の上流部は、追浜小などが以前メダカを放流した場所であり、セキショウ、セリ、オランダガラシ、ヒエガエリなどが繁茂していた。水質もＣＯＤ3～4 ㎎/ℓ で比較的良好である。

◆採集した水生生物

スミウキゴリ 6 匹、シマヨシノボリ 8 匹、

モクズガニ２匹

その他　シマアメンボ、ミズムシ、ミズダニ、ガガンボの幼虫で、メダカは確認できなかった。



⑵.浦郷小学校奥の池

（2019.5.23　11:30～12:00　快晴　気温 27℃
水温 22.5℃）

追浜東町の都市排水路の源流部で、追浜東町自然の広場として保全されている。湧水量は少ないものの、池もあり自然環境が残っている。

◆採集した水生生物

カダヤシ多数、アメリカザリガニ多数、
カワニナ 2 匹、
その他　ヨコエビ、ミズムシ、
クロスジギンヤンマ

カダヤシ♂

カダヤシ♀

カワニナ

アメリカザリガニ

（感想）

今回、鷹取川の水質調査を2回行った。鷹取川の上流と支川を隈なく調べてみて、水環境が少し分かってきた。上流域ではＣＯＤ、亜硝酸など汚れはひどいものではなく、魚が棲める水質であった。

そこで、別途生き物の生息調査を行った。関の入川ではスミウキゴリ、シマヨシノボリ、モズクガニなどが採取された。スミウキゴリ、シマヨシノボリはハゼ科の回遊魚であり、河口から～河川の上流域まで生息し、上流で生まれた仔魚は、ただちに海に下って数ヶ月を過ごし、夏に成長して河川に遡上してくる生活史を持っている。鷹取川にハゼ科の魚が生息していることに驚きがあった。モクズガニの親は海に下り産卵し、稚ガニが遡上する生活史をもち、シマヨシノボリなどのハゼ科と同様に子供が川を遡上できる環境であると思われる。この場所にはセキショウ、オランダガラシなども生育して、魚の生息環境として適当なのだろう。

一方、浦郷小学校奥の池ではカダヤシ、アメリカザリガニが群れを成して生息していた。カダヤシは外来生物法で特定外来生物に指定されていて、飼育、運搬、輸入等について厳しい規制がされている魚類である。この場所の掲示板には、過去にメダカを放流したとされていたが、メダカが放流されたのか、カダヤシが放流されたのかは不明で、当日の調査ではメダカは確認できなかった。カダヤシはメダカの稚魚を捕食し、メダカを絶滅させた可能性もある。また、カダヤシは名のとおり、蚊の幼虫を駆除するために池に放したものと考えられるが、安易に放置すると生態系には非常に悪い影響があるので、できればカダヤシを駆除する必要がある。

アメリカザリガニは緊急対策外来種に指定されていて、こちらは飼育、運搬などは禁止されていないが、池などの生態系に大きな影響を与えている生き物である。

今回、当会では初めて生き物の生息調査を行ったが、できれば今後も経過観察をしていければと思っている。

クロスジギンヤンマン

植物名前にまつわるあれこれ

以前宿泊したホテルの夕食で、ニセアカシアの花をその場で揚げて出してくれました。お一人様１回と書いてある列に並んで揚げてもらい食べると、サクッとした歯ごたえでおいしいものでした。食事が終わって、見るとまだ揚げています。もう一度並ぶと小声で「一回だけです」と睨まれましたが、揚げてくれました。先日、大月

にある白谷丸という山に登りました。そこまでの林道の谷川には、ニセアカシアが満開に咲いていました。あの時の味が忘れられず、取ってきて自宅で揚げましたが、ねっとりしておいしく揚げることはできませんでした。

ニセアカシアの花は、蜂蜜の採取には重要な花で、普通に食べる蜂蜜のほとんどがニセアカシアの蜜です。ところが瓶のラベルには「アカシア」と書かれて白い房状のニセアカシアの花の写真が貼られています。本物のアカシアは３月に咲く黄色い花でミモザともいわれます。多分「ニセ」という言葉の響きが「偽物」をイメージさせるからアカシアとしているのでしょう。同じように西田佐知子のヒット曲『アカシアの雨がやむとき』や石原裕次郎のヒット曲『赤いハンカチ』の歌詞にある「アカシアの花」など、本来はニセアカシアなのにアカシアと使われています。たしかに「ニセアカシアの雨がやむとき」では歌になりませんからね。ラテン語の「アカシアに似ている」という学名からニセアカシアと名付けられたそうですが、偽物扱いされたのではかわいそうな名前です。

さらに和名はハリエンジュです。これまた棘のあるエンジュの木であり自分だけの名前ではないので、二重にかわいそうな名前と言えます。子供のころ近くの関東学院の校庭にニセアカシアが植えられていて「戦争で荒廃した国土を緑化するためにアメリカから贈られました」というような看板があったことを記憶しています。それが今、谷川を埋め尽くし繁殖しすぎているのが現状で、「要注意外来生物」に指定され、伐採されているとのことです。鷹取山にはまだ侵入していないようで、近隣の公園で見かける程度です。

鷹取山にはムラサキシキブの木があちこちにかなりの本数があります。秋に紫色の小さな実をぽつぽつと付けて優雅な雰囲気の木です。園芸店でもムラサキシキブが売られています。ところが園芸店のムラサキシキブにはびっしりと実が鈴なりに付いています。これの名はコムラサキです。ところが園芸店ではムラサキシキブの方が語呂が良いのでわざと変えているのでしょう。だから、近所の家にコムラサキが植えてあり、そこの方はムラサキシキブだと思っています。

6 月に横浜公園で園芸祭りが開かれ、多くの露店が出店されます。以前、勤務地が近くにあったので、毎年楽しみに巡り歩きました。特に店主との話し合いが面白く、値切りに値切って何本か買いました。ある年、テイカカズラが売られていて、店主からテイカカズラの名前の由来（藤原定家が愛した式子内親王の墓に葛になって絡みついた）などを聞きながら、「いくらに負けてくれる？」といつものように値切ると、店主は「これは負かりません、『定価カズラ』ですから」。やられた、店主に座布団一枚。　　（市川　實）

鷹取山のセセリチョウ

日本に生息しているチョウは、アゲハチョウ上科（アゲハチョウ科、シロチョウ科、シジミチョウ科、タテハチョウ科）とセセリチョウ上科（セセリチョウ科）に分類されます。

セセリチョウ科は、世界で約３５００種が知られ、国内の既知種数は３６種です。“ｓｋｉｐｐｅｒｓ”と英語で呼ばれるように、スキップするように敏速に飛翔します。

鷹取山では、イチモンジセセリ（２２４）、ダイミョウセセリ（１００）、チャバネセセリ（２８）、キマダラセセリ（１４）、コチャバネセセリ（３）の５種類のセセリチョウを見ることができます。括弧内の数字は、２０１４年から２０１８年までに蝶類調査で記録された数の合計です。イチモンジセセリは、越冬した世代が水田等で発生・増殖し、時として集団で移動することが知られていて、チャバネセセリは、暖地で越冬した世代が増殖・拡散します。いずれも、鷹取山では秋になると、移動してきた個体が多数見られるようになります。ダイミョウセセリは、鷹取山に多いヤマノイモやオニドコロを食草とし、春、夏、秋を通して見られます。アズマネザサやススキなどを食草とするキマダラセセリは、林縁を好みますが、鷹取山では少数見られます。コチャバネセセリも、アズマネザサなどササ類を食草としますが、鷹取山では、見られる年もある程度です。

三浦半島昆虫研究会では、２０１８年にセセリチョウ類（セセリチョウ科）の記録を集積し、生息状況の調査を行いました（かまくらちょうＮＯ．９５　2019 年 2 月 1 日）。それによると、過去に三浦半島では１０種のセセリチョウ類の記録がありますが、ミヤマセセリ、ギンイチモンジセセリ、オオチャバネセセリは絶滅、ホソバセセリもほぼ絶滅、アワブキなどを食草とし、もともと少なかったアオバセセリは、生息はしているだろうとのことです。セセリチョウ類の減少には里山環境の変容の影響が大きく、セセリチョウ類が好むような明るい雑木林や草地の環境が失われたことにより、減少した可能性が高いと考察されています。個体密度が減少しているとの情報もあるダイミョウセセリやキマダラセセリを、比較的良く見ることができる鷹取山の環境を、これからも大切にしていきたいと思います。　（三科　清高）

ダイミョウセセリ

キマダラセセリ

コチャバネセセリ

鷹取山自然観察会（ホームページを見て下さい）

HP：鷹取山自然観察会

http://takatoriyama.eco.coocan.jp/

連絡先：世話人代表：　本多久男　　e-mail：takatori_0721@nifty.com